し、大根蕪葱等は、吾人の食料を辨じて居る、又動物を見るも、牛馬は荷物を運搬し、犬は夜間を守り、鷄は卵を生み、又曉を報じてをる、又近く一身の上を見るに、眼は色を見・耳は聲を聞き、鼻は香を嗅ぎ、舌は味を知ると云ふ樣に、手は手足は足・各々其形名を異にすると共に、又其職務を別にしてをる、左れば男女既に其形體を異にし、又其精神を異にしてをる已上は、隨て其職務も相異すべき筈である、固より君の爲め、國の爲めに盡くすべきは、男子も女子も、同樣でありますが其盡し方が、違ふのであります。

先づ男女兩性を、形體上より比較するに、男子の體格は、多く骨太にして、肉薄に出來てをるが、女子の體格は、之に反し、一般に骨細にして、而も肉太に出來てをる、又男子は女子に比して、身の長優れ、體量も重し等、概して男子の體格は、運動に便なるやうに出來、婦人は、不便な樣に出來て居ると云ふてよからう、又心理的精神作用の方より比較するに、男子は、知識の方の發達が著しいが、女子には、

情感の方が、よく發達してをる、又男子の心は、物事を綜合的に、達觀すると云ふ風であるが、女子の心は、とかく部分的に働く斜がある、隨て女子は、小さい事に氣がつくが、事物の大綱を捕へるといふ力が少い、例ば他人の着物の破れてをるのや、帽子のへこんでをるのには、氣がつくが、其人物を看破ると云ふ力が少い樣に思はれる。

斯くの如く、生理的に其形體を異にし、又心理的に其作用を異にするのは、即ち男女兩性の間に、其天職を異にすべき基礎であると云ふてよからう、乃ち陣頭に立て三軍を叱咤する如きことは、女子には出來ませぬ、又軍隊には、武勇が必要であるけれども、智惠の力は、最も必要であります、然るに女にはかゝる、武勇と、かゝる智惠とは、比較的劣てをりますから、女子をして軍人たらしむることは、不可能でありますし、其代り懷姙と云ふことは、男子には出來ませぬ、隨て育兒、看護、炊事等、都べて家庭上の事は、女子の天職で、又小事に氣がつき、感情に鋭い所が、家

事整理上に餘程の重寶と考へます、つまり男子は、軍人として、義勇奉公の任に當り、又は勞働であれ、工藝であれ、商業であれ、都べて家の外に出で、活動し、若は政事家となつて、國家の大事を議し、大思想家、大藝術家となりて、世界に雄飛する等、總て對外的、世界的に活動するに適してあると共に、婦人は懷姙、育兒、看護、家計、炊事等、都て向内的、家庭的を其天職とすと云はねばなりますまい。若し女子にして、此天職を務めなんだなら、男子も、亦男子としての天職を務むることは出來ぬことは、恰も足の力によらねば、手をして得意の藝を爲さしむることが出來ぬと同樣である、依て女子が、家庭の整理を擔任し、男子に内顧の患なからしめて、初て男子は、男子として外に向て其得意の事業に從事せしむることが出來るのである、歐州の外交界に、辣腕を振ひたる鐵血宰相は、予が妻に負ふ所の如何に多きかは、これを口にする能はずと云つたさうであるが、此は如何にビスマーク夫人内助の功が多かつたかを、證明してをる、夫人の事業は、毫も外界に現れなん

だが、能く歐州の天地を動かしてをるのである、英國のグラッドストンは、近世の大政治家であつたが、彼をして英國の富を以てしても、買ひ得ざる心の平和を得せしめた者は、其夫人カサリンの淑德に依るので、露國のトルストイ伯一代の著述は皆夫人の淨寫によりて印刷せられ、經濟學者フォーセットは、其夫人の助けにより て、斯學に貢献したさうである、又英のヂスレリーが、議會に大演説を試みる積りで、夫人と同車して赴く途中、夫人は馬車の扉の爲に、指を挫かれたれど、今云へば定めて夫が心を痛め、遂には大事な演説の防げにならうと思ひ、苦痛を忍びて、一言も發せなんだと云ふが如きは、實に妻たるものゝ、記憶すべき逸話であると思ふ、又我國の例で云へば、質素儉約を以て、能く家を治め、貧困の中から、夫に名馬を買はして、武名を揚げさせ、又其留守にありては、留守のことは、御名を汚さじと、偏に心懸け居れば、毛頭念としたまふことなく、唯忠節一偏にのみ、御勵み下さるべく、念じ上げまゐらせ候、といひ送りた山内一豐の妻の如きは、武士的家

庭の理想とすべき婦人と思ふ、婦人は妻たるの外、更に又母たるの任務があります母の心身が、其生子に遺傳し、其感化が、兒童の品性に關係することは、多大なものでありて、何人か母の懷に抱かれぬ者はないのである、一休和尚が、女をば法の御藏といふだけに、釋迦も達磨もひよい〳〵と生むと詠じた如く、如何なる偉人も哲士も、皆母に依り生れ、母の手に依て育てられて居る、ヴイクトルユゴーは佛國の文豪であるが、彼の生れた時は、體質羸弱、到底成人は覺束なかつた、然るに八十四の高齢を保ち、文壇の明星と仰がれ、社會に多大の貢献としたものは、實に母の慈愛の賜である、母は彼を育てる爲めには、殆ど心神を勞し盡したさうである、又英國の大宗教家ジョンウエスレーは、自ら今日あるは、母が幼時の教育にありと云ふてをる、又孟子をして亞聖の大賢人たらしめ、楠正行をして、能く父の遺志を繼がしめたのは、畢竟母の力である。

大學に、欲レ明二明德一於天下一者先治二其國一欲レ治其國一者先齊二其家一と言

ふてありて、家庭は社會國家の基礎で、家庭の齊否は、直に社會國家の治亂に關係を及ぼす、そして家庭の主人たるべきものは、婦人であるから、婦人の心得如何は天下國家の治亂にも關係するのである、前に擧げたのは、賢母良妻の例で、斯くの如き婦人は、國家の安穩、社會の平和を助くるけれど、心得の面白からぬ婦人は、夫を害し、子供を損ずることが多いのであります、監獄や警察署の役人から聞くに罪人の數は、女より男の方が、餘程多いけれども、其男が、敢て罪科を犯す樣になつたのは、多くは女の爲めである、卽ち男が働て來ても、足らぬ〳〵で、女はこぼし立てる、さうすると男は、成程女を滿足させやうと思ふても、思ふ樣にならぬと、お前さん何といふ意氣地なしであらうと、劍突を喰はせる、そこで男は、被れかぶれと云ふ氣になりて、竊盜罪を犯す、さうすると女の前がよい、このやうにして、一度し、二度し、果は强盜、殺人罪をも犯す樣になる、卽ち罪惡の源は、女であるといふことになります、其他古今東西共に、大亂の源が、婦人より起りてをる

のが多い、我國でも、仁應の亂と云ふたら、十一年間も、戰爭が續き、天下麻の如く亂れたのやが、此は將軍足利義政が、贈左大臣裏松重政の女富子を納れて、之を寵愛し、爲に聰明を掩はれて、富子の生むところの子を立てんとして、養子義視を疎んじ、爲に細川山名兩氏の對陣となりて、遂には京都中を燒き盡したと言ふ程の大亂となつたのである、依て婦人の心得如何は、其影響するところ、廣大なることを能く辨へて、特別の場合を除く外は、先づ婦人は、家庭本位を以て其天職と心得、賢母良妻たるを目的とすべきであると思ふ、最も其餘裕には、社會に對して盡すべきは、慈善事業の如きが、適當であらうと思ひます、卽ち赤十字の事業の如き又は孤兒敎養の如き、主として慈善事業が適して居ると考へます。

(二)婦德の根本義　婦人が其天職たる家庭を能く整理し、又慈善事業に携はるに就ても、先づ第一に其身心を修めさねばならぬ、云ひ換ゆれば、能く婦德を涵養せねばならぬ、乃ち婦德の根本義は、那邊にあるかと云ふに、婦人の特長たる感情を能く調和するのである、前に云ふ如く、智力では、男子に及ばぬが、感情の方は、男子よりも密である、已に情が多い已上は、好い情も優てをるが、惡い情も優てをる慈悲同情の如きは、女の好い情であるけれども、嫉妬憎怨等は、惡い情であります から、其好い情を擴大にし、惡い情を起さない樣にするのが、婦德養成の根本義であると存じます。

論語に、孔子が曾參に對して、吾道一以貫之と曰はれた、曾子は直に合點したけれど、他の門人は、其意味が分らぬで、曾子に如何なる事かと尋ねたら、曾子が夫子之道忠恕而已矣と曰ふた、此忠恕と云ふが、朱子の解釋に知ると、盡己之謂レ忠推己之謂レ恕とあるから、同情の事である、おもひやりの心であります、此おもひやりの心さへあれば、殆ど婦人の道は達せられるのであります、一家の中でも、親は子を、子は親を、夫は妻を、妻は夫を、互におもひやり合へば、必ず和合は出來るのであります、彼の南朝の忠臣菊地武時が、打死をする時に、自分は戰

國の慣ひ、打死するは致方ないが、其を知らずに、今日は歸るか、明日は歸るかと留守を預る奥方の心根を思ひやつて、故郷にこよひかぎりの命ぞと、知らでやひとの我を待つらん、と云ひ遣つたに對し、奥方は、故郷もこよひがぎりの命ぞと、知らでや君の我を待つらんと、一首の辭世を遺して死んだのは、夫婦其死所は異つても、其思ひやり合ふ心は、一となつてをるのです、此の思ひやりの心は、親子、夫婦、兄弟の間のみでなく、下女、下男、小僧、丁稚に至る迄、此心を持つのが、主婦たるものゝ道であります。

晋朝の高士陶淵明が、彭澤縣の令となりた時、妻子を故郷に殘して、自分一人任地に居たが、或時故郷にをる我子の苦勞を思ひやりて、僕一人を傭ふて、故郷の子の所に送りて、手紙をつけてやつた、其書面に、汝旦夕之費自給爲レ難今遣二此力一助二汝薪水之勞一此亦人之子也可二善遇一之といふてありた、乃ち汝あけくれ、萬事に力を用ふることは、定めし難儀であらうと思ふ故、今僕一人を送りて、汝が

薪を取り、水くむ辛勞をたすけさせやうと思ふ、併し能く考へよ、此僕ちやとて、やはり人の子であれば、予が汝を愛するが如く、此僕の親も、亦此子が可愛に相違ない程に、能く〳〵いたはりて使へとの意であります、何と深切な心掛けではありませんか、此心を以て、下女下男に對したなら、彼等も必ず能く事へるに相違ありません、此と同樣の話は、俳諧師松雨といふ人が、夜の雪を見んとて、寢てをる丁稚を起し、供をさせて行かうとするのを、其妻がとめて、我が子なら伴にはつれじ夜の雪、といふたのは、召使を思ひやる心が現れた、美しい話です、斯る心掛の人々の家では、とても下女が、奥さんの命を守らぬと云ふ筈はありません、近頃兎角奥さん方より、女中が云ふことをきかぬ、輕薄で困るとの話を承りますが、其には色々事情があり、一概には申されませんが、先づ此方から、同情親切を盡せば、普通の人間なら、必ず恩義に感ずるに相違はありません、牛馬犬猫でも、親切に扱へば、必ず懷くのでありますから、況して人間が感せぬ筈はありません、それで常

に此同情心を、能く涵養して、如何なる者にも、親切を加へて行くと云ふことになれば、其が卽ち公德となるのであります。

前に云ふ如く、婦人は感情に強い丈け、兎角男子に比して、極端に走り易いのであります、乃ち婦人は、喜ぶことが強い丈け、又其反動として怒ることも勝てをります、例ば他人が自分を褒めたと云ふ樣なことを聞くと、直ににこ〳〵顏をしてます、惡口言ふたと云ふ樣なことを聞くと、直に面色を變へると云ふ有樣、隨て愛憎の情も猛烈で、他を愛することに富んでゐる丈け、又人を憎嫉することも、甚しいのであります、ソコデ兎角失態が多いのでありますから、感情の中和を得ると云ふことが、必要であります、情の中和を得て居れば、丁度池水の澄んだ樣なもので、山でも、樹でも、何でも、能く映りますが、其が濁ると、明了と映りません、心が靜まりて居れば善惡邪正が、能く分るから、言ふこと、行ふことに、失態がありませんが、心が亂れて、池水の濁りた樣になると、何事も眞相が分らぬ爲め、言行の

上に失態が出來て來るのであります、池水は人の心にたとへたり、澄むと濁るに定めなければ、心こそ心迷はす心なれ心に心こゝろゆるすな、吾等の心は中々油斷は出來ぬ、見るにつけ、聞くにつけ、吾等の心が動くのである、見ねば慾も起きぬ、聞かねば腹も立たぬが、見た爲に慾が起き、聞た爲に腹が立つと云ふ工合に、事々物々、常に吾等の心情を刺戟するから、間斷なく修養が必要であります。

然るに學校では、主として智識は授けましても、情を和げると云ふことは敎へませぬ、よし敎へるにしても、敎育丈では、其實行は覺束なからうと存じます、されば何の力に賴れば宜いのでありませうか、聖德太子は、憲法十七條の劈頭に、以レ和爲レ貴と仰せられた、心が和げば、自然と同情も、仁愛も生じ、協同一致も出來るのである、故に人間には、和と云ふことが大切である、其和はどうして出來るかと云ふに、篤敬三寶と仰せられた、三寶とは、佛法僧のことで、乃ち宗敎を信せよとの思召である、人心を和げる道は、宗敎を第一とするので、どうしても學問丈

けでは、亂れ易い感情を和げることは、六かしひのであります、左れば、佛法を信ずれば、人心が和ぐから、隨て家も齊ひ、國も治まるから、大無量壽經には、佛敎の感化を御擧げなされて、佛所二遊履一國　邑丘聚靡レ不レ蒙レ化天下和順日月清明風雨以レ時　災癘不レ起國豐　民安兵戈無レ用崇レ德　興レ仁　務修二禮　讓一、と御說きなされてあります、其故婦德の涵養は、感情を和げて、同情心を擴大にせしむるのでありますが、其感情を和ぐるには、宗敎の信仰が肝要と存じます。

(三)信仰の必要　宗敎を信ずれば、種々の利益がある中、第一には同情心を擴大にし、次には不平不滿の心を和け、第三には守操を嚴守することが出來ると存じます、第一に同情心を擴大にするとは、元來宗敎は、神とか佛とかの、大慈悲心を信ずるので、卽ち大慈悲心と合體するのであります、觀經には、佛心者大慈悲是、と說かれて、古德は之を、あはれみを物に施す心より、外に佛の相やはある、と詠せられました、神樣や佛樣は、溫い同情の充ち〳〵た御方であります、大慈大悲を以て、一切衆生を救ひ給ふのであります、慈悲の目ににくしと思ふ者ぞなき、罪ある身にぞ尙あはれなれと云ふ、大な慈悲であります、信仰を得た人は、其大慈悲に同化されるのであります、之を觸光柔輭の益とも云へば、又常行大悲の益とも申します、斯る益があるから、必ず同情心は增大する筈で、此は單に理屈ではありません、事實であります、現に親鸞聖人は、敵と狙ふ辨圓にも、同情の心を寄せられたればこそ、忽に彼は改心して、弟子になりたのであります、法然聖人は、盜賊にも慈悲の涙を注がれたればこそ、彼等も感泣したのであります、其他古も今も信者の身の上に於て、種々同情的美談は、澤山あります。

又吾等の此世界に對して要求は、無限でありますが、世界が有限でありますから、どうしても不服不平は、止み難いのであります、例ば汽車が出來て、百里の路も、半日で行ける、至極便利なと云ふけれども、出來て見れば、又々不足がある、汽車は早くて善いけれども、昇降の時間が忙しくて、氣に喰はぬとか、又電車が出來て

便利であると云つたものが、愈々習慣となると、乗換が不便だと云ひだす、又家庭の上でも、老人があると、世話を焼き過ぎると云ふ、さてなくなると、若ひ者が打揃て、外出が出來ぬと云てこばす、三十圓では足らぬ、せめて五十圓もあればと云ふ、五十圓取れる樣になると、百圓あればと云ふ樣な工合に、これで十分と云ふことはない、缺陷に缺陷を生じ、不足に不足を生じつゝあるのが、人世の常態であります、此は何故かと云ふに、有限世界に向て、無限の要求をして居ては、どうしても不平不服は止まぬのです、然るに無限世界に持て行けば、何の不服も不平も起らぬ、其無限世界とは、宗教を信じて、未來の樂果を豫期するのであります、希望は生命なりで、將來に希望があれば、現在の困難に對して、忍耐も出來れば、又勇氣も起きて來ます、常磐御前が、仇の清盛に身を任せたのは、無念にあつたに相違はないが、三子を助けて、夫の仇を打たせたい希望一で、忍耐が出來、大石良雄が、京都で遊で居る際、薩摩の武士喜劍が、畜生あしらひに、足の指に、魚肉を挾で出

した時は、殘念にあつたには違いないが、何れ敵を打たら、己の精神も知れる時があらうと云ふ、企望あればこそ、堪忍が出來たのである、人世は缺減世界で、とても十分と云ふ事はなけれども、淨土は、無レ有二衆苦一但受二諸樂一の世界と聞けば、願ふこと叶はざることなく、言ふこと行はれざる事はないと信ずれば、他人の知らぬ精神上の樂があるから、法味を愛樂する毎に、不服不平は消へ去るのである、此を大無量壽經には、雖二一世勤苦一須臾之間後生二無量壽佛國一快樂無レ極、と御說きなされてあります、誠に佛法を信ずると、佛陀と自身とは、全く親子の如き關係を結ばして頂くので、行住座臥、暫くも佛陀と離れず、常に佛陀の慈愛の中に包まれて、恰も子供が、母親の懷中に抱かれてある如き有樣となり、悲しい時には慰められ、苦しき時には勵まされ、惡心起れば誡められ、善心起しれば褒めらるゝ心地がするから、常に愉快を感じ、不平不服は轉じて、歡喜心・慚愧心と成て來るのであります。

今一は、節操を嚴守すると云ふことで、此は男子にも必要であるが、女子には別して大切である、貞節は婦人の生命と云ふてよろしい、其貞節を嚴守すると云ふことは、信仰のある人と、ない人と比較すると、信仰のある人の方が多い樣に思はれる殊に身を殺して、貞節を全ふせし、袈裟御前や、又は身を殺して、夫を奬したる木村重成の妻の如きは、無信仰の人では、覺束なからうと思ふ、重成の妻の書面を見ると、唐の項王とやらむは、世に猛き武士なれど、虞氏の爲めに名殘りを惜み、木曾義仲は、松殿の局に、別れを歎くどやら、さらば世に望み窮れる妾が身こそ、せめて御身御存生の中に、最後を致し、死出の道とやらむにて、奉待上候、必らず必らず秀頼公多年海山の御鴻恩、御忘却なき樣、願上候と書き殘して居るが、如何にも貞節の誠が顯はれてをると同時に、未來に對する信仰が、認められるのである、又最も甚しきは、唯だ夫婦の約束した限りで、夫に分れても、生涯貞節を全ふした人があるが、此等は少くも、未來で夫婦にならうと云ふ、信念からでありうと思ふ、其例證はいくらもあるが、自分が最も感じた話を紹介いたしませう。

今は昔し、元弘の頃、出羽象潟に、一人の商人がありましたが、子がないのを心配して、觀音樣に祈願を籠め、幸に一女を擧げたのです、斯くて十五年の後、御禮のために、奥羽三十三所、觀世音の巡賽を志し、飄然として獨り旅に出ましたが、途で偶々一旅人に遭ふたのです、其旅人は、陸奥松島の住人で、其名をば掃部と呼び、同じく觀世音に巡禮を志してをる所から、互に語り合ひて、良き伴を得たのを喜び、夫よりは共に打連れて、津々浦々の觀音詣を終り、いよ〳〵歸鄕せうと云ふ時、白河驛の或る旅籠屋にて、酒酌み交はし、互に別を惜みましたが、此時商人は掃部に向て、我れ一女の爲めに、佳き婿がねを得たく思へども、未だ心に適ふ者がない、聞けば君も我と同じく、觀音樣に立願して、一兒を擧げ給ふたとの事、そして斯樣に圖らずも、禮詣の途すがらに邂逅ひ、互に相親しむ樣になりたのは、過ぐ世如何なる因緣にや、されど今此處で別れなば、又逢ふことも叶ふまいで、此誼

みを、行末永く保たんため、若し我が女をば、御身の子息に配はすことが出來ればこの上もなき幸福であると、眞心凝めて云へば、掃部の喜び一方ならず、直に之を諾ひ、軈がて二人は、西と東に袖を分つた、斯くて一年の後、象潟の商人は、曩の約束を果さんと、人に連れさして、女を松島の掃部が許に遣はした、然るに掃部の一子小太郎は、是より先き、病氣にかゝり、遂に養生叶はず、不歸の客となり、今や野邊の送りを終りた處へ、女は漸く尋ねて來て見れば、右の有樣、びつくり當惑只愁歎の外はない、掃部夫婦は、女の脊を撫りつゝ、我が一人兒は、運拙くして早世して見れば、御身今嫁づかんに其人はなし、未だうら若き身の、行末幸多ければ歎き悲しみは最もながら、只是迄の緣と諦めて、早く象潟へ立歸り、更に良配を得給へと言へば、女は涙にむせび、我が父既に妾をば、郎君に娶はし給ひしに、幸いと薄くして、賴みし君に見ることも、叶はぬとは、誠に殘念に存じます、されど貞婦兩夫に見ずとは、聖の金言、されば一旦心を許せし上は、何とて此儘に去られませうや、妾今よりは誓つて他し男に見ゐませぬ、程に、どうぞ永く此家に置て下されませと、決心の念岩よりも固く、掃部夫妻の切なる勸も、更に諾ふ氣色がないで、夫妻も今は致方なく、女の請ふが儘に、これを養女としたのである、女は其より後、專ら心を盡くして舅姑に事へ、又亡夫の靈位を守りて、其冥福を禱りつゝ節を守ること十數年に及んだ、斯くて舅姑も、相尋で世を去りたれば、女は愈々決心の臍を固めて、遂に其地の圓福寺の、明極禪師の弟子となり、髮を下して、紅蓮尼と稱へた、寺の境内に、亡夫小太郎が手植の梅がありたれば、尼は其側に、一庵を結び、唯だ寂しき燈火を伴として、朝夕の讀經を怠らなんだ、斯くて年月を經る間に或年の春、形見の梅の花が咲いた時、尼は懷しさに堪へ兼ねて、自ら筆を採りて、植ゑおきし花のあるじは果敢なきに軒端の梅は咲かずともあれ、と一首の歌を詠みたら、不審や其翌年には、一も花が咲かぬで、尼は痛く打驚きて、また一首の歌、咲けかしな今はあるじとながむべし、軒端の梅のあらむ限りは、と詠みしに

また舊の如く花が咲いたとあるが、至誠天地を感動さすとは、此事であらう、尼庵を守るの傍ら、自ら煎餅を作りて、之を行き交ふ人々に鬻ぎつゝ、朝夕の食代にしたれば、時人は之を紅蓮煎餅とて、持囃したさうである、尼は其後壽を完ふして、世を終へたれば、里人之を其地象鼻ケ磯といふ所に葬り、其住んだ庵を、心月庵と名附け、其跡は今に遺りて、訪ひ來る人の袂を濕すと云ふことである、節を守り、行を淨うして、其終りを完うした紅蓮尼は、實に婦女の龜鑑とすべきであるが、其行爲の原動力は、全く信仰の賜であると云ふことを忘れてはならぬと思ふ。

十　公德養成と佛教

(一)公德の必要なる所以　凡そ吾人の生活狀態を案ずるに、人は決して孤立して世に處する事の出來ぬ者である、之を人情より考るも、語るに相手なく行くに朋友なくして唯だ一人此世に居るとしたら、其心情の寂しさ、心細さは如何ばかりであらうか、親兄弟の睦じき、親戚朋友の親しみありてこそ、初めて世にあるの甲斐はあるのである、又世の實際より見るも、人に常に相倚り、相扶けて生活して居り、衣食住其他百般の事に於て、日常生活の便利を受け、又教育學問等に於て、文明の進歩を見るも、皆此の寄合ひ暮、相扶的生活の賜物である。

若し吾人が、日常の生活に於て、他人の力を全く借らぬことゝすれば、吾人は天然物より外の物は、一切使用されぬことゝなる、一杯の水を飲むも、天水若は泉水ならば、宜しいけれど、井戸の水や、水道の水は飲まれぬ、何故なれば、一個人の力を以て、水道工事を興すことは出來まい、又己れ一人にて、井戸を堀ることも六かしい、よし此を爲し得るとも、其工事に必要なる器械を拵へることは出來まい、よし其器械を自ら造り得るとしても、其原料はどうして得たか、又之を爲る時に要する食物や、身に着る衣服は、どうして得たか、斯の如く尋ね來れば、一掬の水といへども、際限なき程、多數の人の力を借らねば、飲むことは出來ぬ、更に之を御湯

とし、御茶となすに就ては、炭を要し、道具を要し、どれ丈け多數の人の力を要するか知れぬ、其他吾人の生活に必要なる、百般の事物に亘り、仔細に點檢すれば、如何程の手數がかゝりて居るか知れぬ、卽ち吾人は社會全體の力に依て、今日の生活を營むで居るのである、啻に社會の力を要するのみならず、又國家の力を借らねば、此生活を營むことが出來ぬ、若し吾人が國家の力を借らざる場合は、所謂動物界の生活と同じく、强者伏レ弱轉相剋、賊殘害殺戮迭相呑噬で、貴重の生命も、財產も、之を維持することは出來ぬ。故に吾人今日の生活は、畢竟社會と國家との二重の恩惠を被るものなることを自覺せねばならぬ。

顧ふに野蠻矇昧の時代は、社會の組織も整頓せず、國家の成立も、完全せぬから、隨て道德感念も幼稚である、併し如何なる野蠻、下等社會の徒も、我父母をいたわり、我妻子を愛護せぬものはあるまい、是が人間は、先天的社交性に富んでいて我が同類と一緒にならうと云ふ、卽ち同類を思慕する念の深いものである、例へば

親を思慕すると云ふ念は、誰れ敎へずとも、子の性にある、又子を愛する念は、如何なる親も持て居る、兄弟相睦み、夫婦相和すると云ふも、自然に具はりて居る孟子が性は善なりと云ふも此からで、彼は仁義禮智を以て人性の固有として、四端の說を述べ、又直覺的に性善を示しては、人之所レ不レ學而能者其良能也所レ不レ慮而知者其良知也孩提之童無レ不レ知レ愛二其親一及二其長一也無レ不レ知レ敬二其兄一と云ふて居る位で、此が實行に顯はれたが、所謂私德であるから、私德は或る程度迄は、如何なる時代にも、如何なる社會にも實行され易いのである。

然るに世が進步するに隨ひ、分業が盛に行はれ、國家の組織も完成し、交際が廣まるに伴ふて、道德の觀念も發達する、乃ち公德などが其である、左はいへ、公德もやはり天理公道より起るもので、必ずしも人爲的に構成した道德とも思はれぬ、此事は後に至て詳しく論述する積りである。

我國も封建の世にありては、國々が政治を異にし、之が爲め、或る國或時代などに

は、自國は豐年なるに係らず、隣國は凶年に苦んで居るのを、平氣で知らぬ顏して居ると云ふ有樣は、珍らしくなかつた、然らば其時代は、全く人情を知らぬ、道義などはなかりたかと云ふに、決してさうではない、君命と云へば、水火をも辭せぬ親の爲めなら、命をも惜まぬと云ふ程に、倫常の道は能く行はれて居たので、或點の道德は、今日よりも餘程美しかつたのは、所謂私德は能く實行されても、公德の觀念がなほ幼稚であつたのである。

(二)公德の定義幷に實例　公德とは、私德に對した德義で、私德とは、自己に特殊の緣故、關係ある者に對して、守るべき德義で、例へば父母、妻子、同胞、近親、師匠、主人、僕婢、朋友等に對して、親切を盡す如きで、私情私慾とは異ふ、克己制慾し、修養を待て初めて德と名けるのだから、私慾私情と、私德とは寧ろ反對である、其私德に對して我が緣故の親疎、關係の深淺、情誼の厚薄等に拘らず、弘く人を人として思ひやり、人を人として重ずるの念に基いたる善き行爲を公德と云ふ

ので、隨て公の物品を愛し公の務を大切に守るも亦公德である、而して如何なるものが公德であるかを明了にせんが爲めに、二三の實例を示さう。

一、公衆に對するの公德　先づ公衆と云ふのは、初めて遇た人、無緣の人、道路などで遭遇した人、或は只一時同伴、若は同棲する人を云ふので、例へば旅行でも して、汽車や、汽船などへ乘た時分に、今迄見た事も、聞た事もない人と、同伴同行することがある、斯る人に對しては、二度と遇はぬと思ふ爲めか、又は旅の耻はかき捨てと云ふ心からか、往々人として、爲すべからざる、振舞をなして、耻ぢぬ人がある、卽ち先取權一方で、先へ其席を占めたからと云つて、大な顏をして、後から誰れが來ても、少しも席を讓らない者がある、それも少しも餘地のない時なら、仕方もないが、少し寄てくれたら、子供だけは寬に容るゝ事が出來、少し窮屈を忍んで呉れゝば、婆さんを其處へ座らせる事も出來る塲合に、少しも讓つて呉れぬ、中には大な鞄を態々其處へ置き、そして寢て居る者もある、甚しいのは、中央の通

行場所へ、鞄を置て其上へ飲食物を並べ、差向ひで三四人が酒盛を初め、歌を唄つたり、劉酔して聽くに堪へぬ卑劣の言葉を吐いたりするから、婦女子などは小用に行き度も、わう行かぬと云ふ樣な事もある、其外旅舍などで少し茶代を餘計やつたと云ふを鼻にかけて、終夜酒宴などを開いて、隣客の迷惑を何とも思はぬ者もある又は他人の喧嘩を面白がりて、囃し立てゝ見ると云ふ樣なことは、何れも不公德でありて、己を推して人に及ぼす心があれば、縱令あかの他人に對しても、斯る事は出來樣筈はない、依てこんな場合に、己の行爲を愼で、同情深切を盡すべきである

二、公財に對する公德　公財とは、目前に見る能はざる漠然たる團體、例へば會社、學校、國家などの所有物の如きを云ふので、之に對して、少しも斟酌なく、我儘勝手の振舞をなすは、公財に對するの不公德である、乃ち公園の竹木を折り、圖書館の書籍を汚し、社寺の墻壁に樂書したり、或は自家では一枚の紙にも注意し僅かの炭でも、儉約する程の人が、役場や學校では、澤山な炭や紙を惜氣もなく使用

し、又自己の私用に、公用紙を用て平氣で居る者がある、此等も個人の所有を大切にする心を推せば、公財に對しても必ず大切にすべきである。

三、公務に對する公德　人の此世に處するには、其々の公務がある、其に對して義務を果さぬのは、卽ち不公德で、例へば一旦約束した事を、妄りに破り、爲に他に迷惑を及ぼすことがある、乃ち倶樂部や、會を組織するに、一旦會員となり、部員となりた上は、其規則を遵奉すべき筈なるに、之を守らず、又會費を怠納し、無屆缺席などする者もある、又商人などが、見本と實物とを違へる輩もある、又仕事に陰陽をし、骨盜をするのも、一種の不公德で、又國民として種々の方法で以て、租稅、兵役、敎育、衞生等の義務を正當に果さぬものもあり、又國民中でも、公民とも云はれる資格の人は、一段責任の重い譯であるが、そんな人の中でも、公職員の選擧、被選擧の場合などに、隨分不德の事が多い、又先輩先覺とも云はれる人が無責任な大言壯語を吐いて、後進を煽動し、又は少年者流に惡感化を及ぼすを顧み

ずして、公然不品行を行ふ者などは、何れも無責任の不公德である、其他官吏などが、職務を利用して、自家の利を圖る如きも、私曲の不公德で、此等も各自の職務を、忠實に盡すの心があらば、斯る不公德が出來やう筈はない。

抑も 敎育勅語に「博愛衆ニ及ボシ」又「公益ヲ廣メ世務ヲ開キ」等と仰せられたれば、國家の爲めに、有益なる事業を興し、社會の爲に進歩を計る等の事は、公德の最も大なるものであるが、是等は容易の事業ではない、けれども其小なるものは心掛け次第で、直に之を實行することが出來るのみならず、小は積で大となり、大は小より初まるもので、況や凡ての事業は、精神が基礎である、如何なる廣大なる事業の如きでも、其人の精神が、偏頗なる利己主義や、過りたる個人本位であるなれば、國家社會の進運を謀る所か、甚しきは一般人類に大迷惑を來すことがある、たとひ小き職業の樣でも、其人の精神が、思ひやり讓り合ひ、卽ち公德心が充ち滿ちて、誠實の念慮が盛んでありたならば、やがて國家社會の幸福の基となる、それ

で上に公德の實例を示したのも、世人の不德に陷り易く、而も心掛一つでは、直に實行の出來易い樣な、德義に就て示したのである、依て世人が、各自に注意し、進んでは國家社會の幸福安寧を期し、退いては公衆に迷惑を掛けまじと心掛け、公德の養成を講せられたきことである、元來德之爲レ言得也行レ道而有レ得於心と、古人も解して居りて、善き行を積み、之に慣れて、始めて習得する所のもので、不德は惡しき行の癖となりて、其人に染み付て、離れぬ樣になるのである、依て德の堅固なる者の行は、水の低きに就くが如く、强て勉めずして自ら善に向ふもので、孔子が七十而從二心所レ欲不レ踰レ矩と云はれたるが如き、卽ち是である、而して德の未だ至らざる間は、一言一行に戒愼を加へねば、知らず識らず罪惡に陷る憂かあり、漸く善事に慣るゝとも、少しく油斷すれば、正路を踏み外すことが多い、譬へば重荷を車に載せて、山坂を上る樣なもので、昇るには非常に困難で、而も一歩過れば、忽ち落下退轉する如きものであるから、修養てふことは最も大切である、而

して其修養は、實行に依て之を遂ぐるもので、如何程善きことを聞き、若は知りたりとて、其等の知識思想が、直に德となるものではない、之を實行の上に應用せねば駄目だ、乃ち公德は知るが目的でなくて、行ふが目的である、理論的でなくて、實行的のものであれば、日常の見聞覺知、時處諸緣に於て、論語に所謂見レ賢思レ齊焉見二不賢一而內自省也とか、若は吾日三省二吾身一てふ工合に常に養成を怠りてはならぬ。

(三)佛教の說明　抑も公德てふことは、或意味に於ては、歐米に於て大に發達した樣である、此は歐米各國に、各種の民族混合雜居し、向ふ三軒兩隣りに於てさへ、種々の人種が集りて居ると云ふ有樣であるから、異民族間に共通すべき道德的行爲を見出し、權利を重んずると共に、義務を重んじ、是に依て社會の安寧秩序を保たんとせし爲め、一面社交的道德は、大に發展した樣でも、元々個人を本位として、人爲的に構成した道德であるから、其弊として個人の自由、權利を偏重し、遂に危

險思想に陷ることがある、今吾人が奬勵せんとする公德は、歐米に於ける意味の如何に關せず、　御勅語の御趣意により、所謂採長棄短で、我國民性に適應せる道德教によりて、之を皷吹し、之を普及せんとするのである、其には佛教の衆生恩の慈悲觀の說明が、最も適切で、而も深大の意味が加はると思ふ。

凡そ佛教倫理の實際的、根本主義を主觀的より云へば、知恩報德より外はない、然るに之を客觀的方面より云へば、其對象が、無量無邊なると共に、報恩の行爲も亦無量無限と云はねばならぬ、それで恩義の種類を分つことも、經說に依て具略の相違があるが、心地觀經には國王、父母、衆生、三寶の四種の恩義に對して、忠、孝、博愛、報謝等の德義を實行すべきことを御示しなされてある、凡そ如何なる道德教に於ても、仁慈博愛を美事とせぬ教は、恐くはあるまい、然るに人は何故に博愛せざるべからざるかの疑問に至りては、之に快答を與ふるものは少なからう然るに佛教に於ては、之に快答を與へてをる、卽ち佛教には三世因果、生死輪廻を說き

縱横無盡に、一切衆生は相互に恩義あることが示してある、予が前に公德の必要なる所以に就て、聊か辨じたのは、普通常識の及ぶ所に就て、一應說明したので、云はゞ佛敎衆生恩の一部分を示したのであるが、佛敎は此已上に、衆生恩の深大なることが說てある、乃ち吾人は現在一世に限らず、時間の無限なると共に、吾人も亦無限無際でありて、而も其始際もなければ、亦其終際もなく、生の前には必ず死あり、死の次には必ず生あり、生じ生じて、生の始を知らず、死し死して、死の終を窮むべからざるもので、無限の衆生が、無限の時間中に、生死相續する狀況を、一大活眼を開きて長眸一番すれば、過去無限の時間に、無量無邊の生死を重ね來る間には、諸有る生類を、父母、夫婦、兄弟、姉妹等としたことであらう、今日こそ親疎、遠近あれども、昔日を思へば、たとひ下等の動物に迄も、大恩を受たことは現在の父母、兄弟、姉妹の如しと思へば、時間に古今の相異はあれ、既に被りた上は、感謝の情が起る筈で、古歌に所謂、ほろ〳〵と鳴く山鳥の聲きけば、父かとぞ

思ひ母かとぞ思ふ、　之が慈悲、博愛、同情等の行爲となるのである、動物に對してさへ此通り、況や同一人類に於てをやぢや、左は云へ、佛敎の博愛說と、墨子の兼愛說とは、同一視すべきでない、佛敎は常に差別平等の相卽相融を談じてをる、是が宇宙の眞理である、見よ宇宙間の森羅萬象は、悉く差別して、同一の物としては決してない、お互人間が千人集りても、萬人集りても、一人として同じ顏の人はない、其他禽獸、草木皆然りである、併し其中に同じく人と云はれ、同じく動物と云はれるは、其中に共通普遍の點があるからぢや、其不同の點が差別で、其共通の點が平等である、而も其不同と共通とは、一物の表裏で、全然別體ではない、其共通の點も、動物、植物、礦物と分けた時と、生物、無生物と、分けた時には、其共通の範圍に廣狹がある、進で現象本體と分けた時は、益々共通の範圍が廣まる、そこで宇宙間の事物は、其本體より云へば、平等普遍で、其現象より云へば、差別無邊である、而も本體を離て現象なく現象の外に本體はなくて、何時も相卽相融

である、依て佛教には、仁慈博愛に於ても、やはり此平等差別相卽相融論を應用してあるから、決して惡平等などに陷る氣遣はない、既に宗密禪師の盂蘭盆經新疏には、父母有二遠近一、恩有二輕重一、報有二分全一と云ふてをられる、實に注意深切ではないが、況や他力の信仰により、佛陀の大慈悲を感得したものは、層一層の慈悲が加はる譯である、眞宗の祖師親鸞聖人が、一生衆生濟度の爲めに身を忘れ、魚肉に對しても、尙ほ慈悲の涙を垂れ、死屍をば加茂川に流して、魚に與へよと遺言し給ひし如く大慈悲は、眞に是れ博愛の結晶である。

それで我國も、佛教の隆んな時代、若は盛な地方、或は强信の人々の上には、公德的美譚はいくらもあります、彼の楠正行が、瓜生野の戰に、敵の溺卒五百餘人を助けて衣藥を給して勢はつた事は、有名な話だが、此は敵といへども、やはり同一民族で、一時の敵であるが、島津義弘父子が、慶長四年六月の日附を鐫りて、紀州高野山上に建てた石碑の文面によれば、如何に當時の勇將間に、博愛思想が隆であつたかゞ知れる、其文はかうである。

慶長二年八月十五日於全羅道南原表大明國軍兵數千騎被討捕之內至當手前四百二十人伐果畢

同十月朔日於慶尙衞泗川發表大明人八萬餘兵擊亡畢

爲高麗國在陣之間敵味方鬨死軍兵皆令入佛道也

右於度々戰場味方士卒當弓箭刀杖被討者三千餘人海陸之間

橫死病死之輩具難紀矣

慶長第四己亥歲六月上澣

薩州島津兵庫頭藤原朝臣義弘
同　子息少將忠恒　建之

敵味方鬨死の軍兵を皆佛道に入らしめんが爲めとは、近世の所謂博愛思想を最も明瞭に表明し、一視同仁の精神を發揮して、殆むど餘蘊なしである。

抑も赤十字社が設立せられて、博愛仁慈の觀念に基づき、戰爭の慘禍を少ふして、交戰兩軍の傷病者を、相互に庇護するの事業が、始めて歐州に實現せられたるは近く第十七世紀以來の事である、然るに三百有餘年の昔に、既に〳〵斯る博愛思想が普及されて居たとは、實に驚入の外はない、左ればこそ、先年米國の觀光團が我日本に來り、各地漫遊の途次、高野山に登り、右の碑文を見て、我國の精神的文明が、早く既に斯の如き點に迄、進んで居たことを、非常に稱讃したとのことである、而して斯る博愛思想は、佛教の感化力であることは、高野山に建た事實と、其文面とを見れば、直に分る、其後佛教は、表面盛な樣でも、實質既に衰へて、德川時代の中世已後は、敵にさへ斯る同情を寄せし君さへありし薩摩でも、下民の間には、隨分殘忍酷薄な事をやつたらしい、其れでも佛教信仰の盛な所は、異た所があつたことは、高崎男爵の懷舊談が、明治四十二年六月の中外日報に掲載してあつたから、其を見れば分る、其れによると、薩摩の風習として、マビキ卽ち墮胎と云

ふことが流行して、我子でも、三人已上は墮胎して、而も其を正當の事として居たため、高崎男が、舊地頭を勸められた時に、之を矯正する爲めには、人民を集めて訓諭したり、又は五人已上も子を產まば、男女に係らず、一人に二石宛の扶持米を下渡すとか、色々と苦心せられたのである、然るに領內に垂水といふ、百戶に足らぬ漁村があり、極貧村で、而も漁民ばかりであるに、古からマビキを行ふもの、一人もないとのことで、能く〳〵取調べて見られると、全く淨土眞宗の敎義を信じて居たので、初めて宗敎の感化力の偉大なるに驚き、是迄水戶流の漢皇學を學び、一般の風潮に驅られて、佛法などは外國の敎として、深く注意せず、寧ろ排斥した心得違を悔ひ、其事を伊知地正治氏に通知せられたれば、氏も大に感心して、今後は學問の方針を一變せうと申越されたとのことである。

又孝子として有名なる、筑前國宗像郡吉武村大字武丸の正助翁の如きは、非常なる篤信家で、君に忠、親に孝なるは申迄もなく、如何なる人に對しても、深切で

あるのみならず、牛馬に到る迄も、慈悲を施して居る、例へば農事其他で牛馬を遣ふ時には、必ず人に對するが如く、今日はこれ〳〵で田を鋤かせ、重荷を負はすがさぞ苦勞であらうと云て、其から遣ふ、又貢租を運ぶなど、馬に荷を負せし歸りには、大概馬に乘る者であるが、正助翁は乘る所か、鞍も自ら負ひ、簑笠まで自ら携へ、馬を息めて歸りをつたさうな、だから如何なる荒き牛馬でも、正助翁が飼へば必ず柔和になりをつたと云ふことである、其他佛敎信者間に斯る事例は澤山である

已上佛敎の敎義が、如何に世の公德を補ひ、又事實補ひしかを御話いたしたが、希くば吾同胞が、名自に鞏固なる信仰を得て、東西相倚り、彼此相濟す文明の今日、益々公德の養成を計り、國家人道の爲めに盡されたきことである。

十一　大國民の覺悟

(一)文明の大勢

戊申の御詔書に「方今人文日ニ就リ月ニ將ミ東西相倚リ彼此相濟シ以テ其ノ福利ヲ共ニス」等と仰せられて、此の人文とは、天文地文人文と熟して天地人三才の中、最靈たる吾々人類が、天地間に作り成せる文明の事で、文明の始源は、人類が相倚り相集りて、協同生活をして昔より胚胎し、漸次其萌芽を發して、五千年來葉を出し、枝を交へ、今日では、既に燦爛たる花を開くに至つたと申しても差支はない、ソコデこれから先きは、其實を結ばしめねばなりませぬ。

凡そ世界文明の源は、今より五六千年前に、四箇所に煥發したので、一はナイル河畔の埃及文明、二はユーフレテース、テイグリス兩河の流域なるメソポタミヤ平原卽ちバビロン、アッシリヤの文明、三は恒河、印度河の流域たる印度文明、四は黃河、楊子江畔の支那文明である、此中後の二たる印度文明と、支那文明とは、印度文明の精華たる佛敎が、支那に入るに當て相接觸し、是れが東漸して、朝鮮を經て我が日本に入つたので、是が東洋文明の潮流である、我國は約一千七八百年の昔に先づ支那の文明を受け、それから後に印度文明を受けたのであるが、我國は妙な國

で、外國の文明を受けたからとて、それを其儘に摸倣するといふでなく、能く之を消化すると云ふ、一種の特色を持て居るので、彼の　光格天皇樣が「敷島のやまと錦に織りてこそ唐紅も色にはゑあれ」と仰せられた如く、支那から來たものも、印度から來たものも、皆我日本のものにしてしまふので、若も夫が我國風に合はぬなら、之を排斥してしまふと云ふ狀態であります。

又初の二たる埃及、並にアッシリヤの文明は、西流して希臘に入り、文質赫灼たる、希臘文明も成り、學術の進歩は、頗る甚しいものでありたが、希臘の力衰へて、文明は其西なる羅馬に移り、猶太に芽を出したる基督敎が、羅馬に入りて、羅馬大帝國は亡びたれど、基督敎のみ獨り勢力を有し、此基督敎の爲に、折角希臘羅馬で培はれた西洋文明も、一頓挫を來して、凡ての學術は、宗敎の奴隷の如くなつたが、宗敎改革が先登を爲して、暗黑の夢は打破せられ、次で文藝の復興となり、科學の進歩となりて、近世文明の華を咲かせた、其際我が日本は、精神的にこそ進

歩はしたれ、物質的に於ては、漸く風力や、水力を僅に利用することを知て居つた丈けで、未だ蒸氣力を使ふことは知らなかつたのに、西洋に於ては、汽車あり、汽船あり、盛に蒸氣力を使つて居るといふのであるから、初て西洋文明に遇つた時には、非常に驚いたのも無理はない、彼の米國水師提督ペルリが、浦賀に來た時は、實に名狀すべからざる騷動であつたさうな、其から攘夷論だの、開港論だの、色々やかましかつたが、幕府は到底外國と戰爭するの不利を考へて、假條約を結ぶことにした、それを攘夷家は、大に怒りて、其結果、丁度ペルリが來てから十一年目に長州の志士達が、馬關で英、佛、米、蘭の聯合艦隊と戰つた、其時に長州の勇士達は、海戰では危いが、陸戰なれば、先祖已來鍛へた所の日本刀を以て、夷狄共を片つ端からやつ付てやる、きつと勝つに相違ないと言て居た、併し實際戰て見ると僅か二時間か、三時間で、海岸の砲臺は殘らず破壞され、水兵は上陸して、砲臺を占領した、そこで陸に上つて來た時には、思ふ存分にやつゝけろと云ふて、大に奮

闘した、當時長州軍には、槍の名人もあれば、立派な劍客もあり、將又弓の先生も居たが、其等の人々が向て戰て見ると、どんな達人でも、名人でも堪らない、直に狙擊されて、ばた〳〵倒れる、迚もこれでは叶はぬと、遂に涙を呑んで、所謂夷狄と和睦した、それより我國人は、文明の力に對するには、非文明の力を以てしては、決して抵抗の出來るものではない、文明の力に抵抗せんとするには、矢張り文明の力を以て當らねばならぬことを、明に曉つたのである。

日本は斯く物質的文明が缺げて居た、併し祖先以來、傳へ來りし東洋文明、卽ち精神上の文明は、歐羅巴の精神的文明に、優るとも劣らぬ程のものを持て居たのである、唯だ封建の政治に甘んじて、國民に進趣の氣性が乏しかつた爲に、我物質文明が發達せなんだ、此が爲め、一時歐洲物質文明の力の爲に征服された、然るに我國は、迚も西洋文明の力に敵せぬと見るや、直に彼の長を採て、我に利用すると云ふ運動を起した、卽ち將來の國是を盛んにし、我國を文明に導く所の國是、卽ち開國

進取の方針を採る事になつた、其國是は、明治元年に仰せ出だされた、五箇條の御誓文と共に下された御宸翰に依て明になつた、之を拜讀すると、其中には　陛下が親ら身を以て、國難に當るその御決心を御示しなされてある、內國だけの事ならまだしもであるが、其時は、外交の大難がふりかゝつて居るので、實に國初已來の國難であつた、然るに　陛下は御幼冲であらせられたるにも、拘らず、一身の艱難辛苦を問はず、親ら四方を經營して、億兆を安撫し、國威を四方に宣布せんと、御決心あそばされた御勇氣の程が、歷々として現はれて居る、我等臣民たるもの、感泣するの外はない。

其れから廢藩置縣となり、歐米文明の長所を採りて、制度文物の改善となり、法典の編纂やら、廢刀令が出るやら、又敎育令、徵兵令の御發布となり、遂に立憲の政體となりたのである、然るに兎角物事は、一方に偏し易いもので、斯く彼を倣ふあまり、一時は西洋と云へば、何も彼もよいものゝ樣に思ひ、一も西洋、二も西洋、

三も西洋、四も西洋で、甚しきは上等と云ふ事と、舶來と云ふ事とは、殆ど同一の意義を持つ樣に思はれ、我國の製品たることの知れきりたものでもよいものなら、此は舶來品だから高價です、抔と云つたこともある、されど段々と交際するに連れて、西洋のものでも、必ずしもよいとは云はれぬ、又よし西洋で行はれてよいと思はるゝ事も、是を日本に用ひる場合には、餘程斟酌せねばならぬと自覺する樣になつた、此時に中りて　敎育勅語を下し給ひて「克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ敎育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス」と仰せられて、國民敎育の大針方を御示し下され、終に東西文明調和の天職が、我が日本にあるといふ議論となりて、日本主義を中心として、西洋の文明を調和して、第二の新文明を造るの必要をいひ、我が國に都合のよいものは、之を他に採り、都合の惡いものは、用ゐないといふ採長棄短の說が行はれ、又事實我國民は之を行ふてゐる事は、近く日常の衣食住を見ても分る、其最も大な例は、卽ち日露の戰爭で、

我が蕞爾たる日本が、尨大なる露國に勝つたのは、誰れも皆日本魂の權現であると云ふ、いかにもそれに違ひない、併し在來の日本流のみで、勝つことが出來たであらうか、成程其精神は日本的であらうが、其使用した武器は、重籐の弓でもなければ、大身の槍でもなく、又古來の帆船でもない、皆西洋文明の產物たる機關砲なり速射砲なり、又最近式の軍艦を持て居たからである、卽ち西洋文明の利器を用ふるに、日本魂を以てしたからである。

(二)彼此相濟と國運發展　如斯今日は、東西の文明相接觸し、彼此皆競て、文明の先導者たらんとし、宇內各國の一擧一動は、直に我國に影響し、我の一言一行も亦直に彼に波及すること、恰も波紋の如くである、今其有樣を云へば、三河は古來有名なる木綿の產地でありた、然るに印度、支那、亞米利加合衆國等より、精良にして價廉き綿が輸入さるゝ樣になりては、三河では、綿を植ゆるもの殆んど無くなり、菓子や、饅頭に用らるゝ、麥粉は、米國より來り、又農家の肥料には、滿洲の

豆糟、濠斯太利亞の骨粉が來、摺附木卽ちマッチは、從來日本には無かつたものなれど、我國の製品が、精良にして且つ廉價なる所より、東洋、南洋、及び歐羅巴の一部にも輸出せられ、是が爲め歐洲のマッチ製造場は、倒產するものもあると云ふ有樣、又ハンカチーフは、是も昔しはなかつたものなれど、日本の女子は、巧妙に且つ價廉く其緣を縫ふ所から、歐米人の嗜好に投じ、蝙蝠傘やビールも、從來はなかりたれど、今では澤山に製造せられ、世界は共通となり、其福利を交換すること實に隣家の如くであり、而も皆互に我こそ世界文明の優勝者たらんと相競ふて居るのが、今日の狀態である、今我國も、此日進の大勢に伴ひ、文明の惠澤と共にせんとするには、非常なる決心と、偉大なる努力とを要するので、其國家としての覺悟は、國運の發展を計るの外はない、御詔書に、「日進ノ大勢ニ伴ヒ文明ノ惠澤ヲ共ニセントス固ヨリ內國運ノ發展ニ須ツ」と仰せられて、國運の發展と云ふことは、文明の惠澤を共にする必須條件である、而して我日本は、抑も幾許の發展を成した

であらうか、維新後四十餘年、實に長足の進步をしたのである、維新當時は僅に東洋の一獨立國と認められた丈で、支那や、朝鮮も、同樣位に見られて居たのが、二十七八年の役に、支那に打勝てから、初て東洋の一强國で、支那や、朝鮮とは國情が違ふと云ふことが認められ、多年の問題たる條約改正も出來、其より日露戰爭の結果は、世界の强國として認めらるゝ樣になり、殊に先年朝鮮を併合して、愈々人道の扶殖、文明の普及を理想として、帝國々運は、益々發展しつゝあるのである。

(三)我國の國力　我が帝國の運命斯の如し、而して我國は、果して世界列强に對して、肩を並べることが出來るか、どうかと云ふに、元來一個人の上で考へても、先づ完全なる人格と云へば、學問、技藝、財產、健康、道德等が備はり、而も鞏固なる信念が其根底となりて居らねばならぬ、是を國家に就て云へば、其國民全體の敎育、卽ち智力や、一國の財力なり、又農工商等の實業なり、陸海軍の武力、一般國民の道德觀念と、宗敎の信心が鞏固でなくてはならぬ、然るに我國は軍備は充分で

はないが、暫く對等と見ても、其他は實に御話にならん、先づ各國の富力を比較對照するに、最近の統計表に依るに、英國は千百八拾億圓、佛蘭西は八百七拾億圓、北米合衆國は千六百參拾五億圓、獨逸は八百億圓、墺太利は四百五拾億圓、伊太利は參百拾五億圓、露國は六百四拾五億圓に對して、我國は百拾七億圓で、一人當の富力は、英は參千圓、佛は貳千五百圓、米は貳千參百五拾圓、獨は壹千五百圓、墺と伊は千〇五拾圓宛にして、露は六百圓、然るに我國は貳百五拾圓の割合である、又貯金額を驗べて見ても、我國は餘程劣て居るのみならず、國家としての借金も亦頗る夥い、近來の調査に依れば、國債總額は貳拾六億圓もあるそうで、隨分澤山な借金であるが、其は詰り我々及び我々の子孫が、償還して行かねばならぬ、年々少なからぬ利息を拂ふて、元金も遂には償還せねばならぬ、之を人口に割り當て見ると、一人について約五拾圓と云ふ借金を脊負て居る譯である、此貳拾六億の內に內國債が約拾壹億七千萬圓、外國債が約十四億四千萬圓ある、何故に斯る大な借金

をしたかと云へば、主に戰爭の費用に使ふたのである、最も內國債の內には、鐵道の買收公債が五億圓と言ふものがあるが、外國債に至りては、全く戰爭の費用と云ふて宜しい、而して貳拾六億圓に對する利息ばかりが、年々壹億貳千萬圓已上拂はなければならぬ、其內で內國債の方は、此國內で政府の方から、公債の募集に應じた者に利息を拂ふ、矢張り國內で、取りたり遣りたりするのであるが、外國債に至ては、日本の金を持て拂はねばならぬ、外國人は札では承知せぬ、是非正金でやらなければならぬ、外國債の利息ばかりが、年々六七千萬圓宛拂はねばならぬ、外國へ金を貸して居る國と、借りて居る國とは、太變な相違である、それで國家の財政が、中央政府の歲出が、約五億圓の中で、行政費卽ち一般の行政上に要する所の例へば官吏(文官)の俸給とか、廳費とか云ふものと、軍事費卽ち陸海軍の費用、軍人の俸給など、國債費卽ち公債の元利の償還、又は恩給年金、詰り政府の義務に屬する費用が、百に對する貳拾五六が行政費で、七拾四、五が國債費なり、軍事費

なりに用て居る有樣で、此五億圓を五千萬人に割て見れば、一人平均拾圓、之に地方經營費が、全國で凡そ貳億圓、彼此拾四五圓宛は、老人でも小供でも、凡て負擔して居る譯でありて、此は直接稅、間接稅等を以て收めて行かねばならぬ、斯る狀態であるから、富力の競爭に至りては大に努力せねばならぬ。

さて又敎育はと云へば、日本は帝國大學が僅に四箇所なるに對して、獨逸は二十二箇所、英國は十箇所、佛國は四十五、伊太利は二十一、露西亞は八と云ふ有樣で、中學も獨逸にては、九年の中學が七百、六年のが五百、都合千二百あるに、日本では三百で、尙ほ學生の入學なきを嘆ずる中學もあり、又大學々生の數は、日本は漸く六千位なるに、獨逸は六萬人も居る、又小學の如きは、我國は六年を以て義務敎育となすも、獨逸は八年の義務敎育を執り、徵兵の統計を見るに、無學者は一萬人に對する二の割合なるに、日本は百人に對する六の割合であると、或る米國人の調査に出て居る、然して其敎員を比較するに、我國は十三萬人の敎員中、三萬人は代用敎員を用ひて居り、甚しきは、村長の息子が高等學校の入學試驗に落第して、所置に窮して、一時代用敎員とすると云ふ有樣、然るに獨逸には、如斯ものは一人もなく、又其資格を見るに、高等小學を卒業して、豫科一年、本科四年の師範學校を卒業し、又は八年の小學を卒業して、三年の豫科、三年の本科を卒業して、一時試驗的に敎員とし、二年乃至五年間に試驗を受け、第二回の試驗を通過して、初めて正敎員となり、第三回の試驗を受けて、及第して高等小學、若は高等女學校等の敎員となり、第四回の試驗を通暢して、初めて小學校長となるので、而も如斯者が充滿して居るのである、又大學を卒業して、一應中等敎員たるの基礎を得、敎育學、哲學、語學等の五科目を具備する證明を得て試驗を受け、及第の證を得て、中學に分遣して、一年間修養を積み、校長の證明を取り、文部省に報告して、大臣の認可を得て、初めて敎員となると云ふのである、如斯敎員ゆへ、其敎授も實に完全なものである、我國にては、全國の中學に於て、其三分一は無資格敎員で、尙ほ不足

を感ずると云ふ有樣、特に全國小學生徒の數は、約六百萬人にして、此が中學已上に進で行く者は、二十萬人しかない、左すれば五百八十萬の人間は、漸く小學敎育丈で終るのであるから、到底智力の邊もなか〳〵追付き難い。

又商業、工業、農業等に於ても、彼等は多く學理を根基とし、道義と經驗とを本源とし、加ふに豐富なる資本を以て、日々夜々に勉强して居るから、是又我國は餘程劣て居る、殊に一般國民の信念の缺乏、就中將來の大國家を背負て立つべき、青年有爲の士が、信仰の薄弱に至りては、實に寒心せざるを得ずである、そこで今日は戰後日尙ほ淺き、庶政益々更張を要する時代であるから、當路者は、內治外交共に國運の發展に努力すべきと共に、國民も亦其心を體して、自ら其任に當るの覺悟がなくてはならぬ、由來日本人は、自己の頭上のことを、他人に任せて仕舞ふ惡癖がありて、政治の事は、全く政治家に任じ、衞生の事は、衞生家に任じ、敎育のことは、敎育家に任じて、自己の問題を他に任せて、只管目前の樂を得やうとするか

ら、日本の製作品は、粗製濫造で、歐米の市場に其價値を失ひ、折角戰爭によりて贏ち得たる國民の名譽も、商業其他で自ら失墜しつゝあるとは、實に殘念ではないか、リードの著はせる社會道德の中に、一等國が他の二等國に圍繞せられて居るほど、危險なことはないと云つたのは、孟子が敵國外患なき者は國恒に亡ぶと云ふたと同じ論法で、歐洲列强が、悉く奮鬪主義、努力主義でやつてをるのは、周圍が皆一等國であるから、一寸も油斷は出來ぬ、隨て何時も勇氣滿々〳〵、元氣旺盛で、益〳〵進步するのである、我國は支那の如き老衰國や、印度や安南の如き、亡國を隣りに並べて居るから、兎角油斷してどうもならぬ、須らく覺醒一番、眼を世界の大勢に着け、英米各國と覇を爭ふの勇氣を以て、事々物々、國運の發展に資する樣、朝野協力せねばならぬ。

四上下一心　然らば如何にして、國運の發展を計るべきかと云ふに、戊申の御詔書には、政府並に國民の心得としては、「宜シク上下心ヲ一ニシ」と仰せられ國民個

人の覺悟としては、「忠實業ニ服シ、勤儉産ヲ治メ」其の精神の根基は、「惟レ信惟レ義」、風俗上は、「醇厚俗ヲ成シ、華ヲ去リ、實ニ就キ、荒怠相誡メ」との給ひ、更に其實行法としては、「自彊止マサルヘシ」と仰せられた御趣意を能く奉戴するの外はない、而して上下一心と云ふ事は、至要中の至要で、我等の心掛一つでは、僅か一歩の田を耕すも、國運發展の基礎となり、一錢二錢の小商をして居ても、それが直に國力充實の本たらしむることが出來る、今日只今より、日本の教育を、獨逸に負けないやうにしやう、又只今より、日本の商業を、英國に優るやうにしやうとしても、それは六かしい、併し此心さへあれば、時何かは歐米諸國に負けないやうに發展せしむることが出來る、而して此心は、今日只今からでも起されるから、何でも心掛けが大切である、荀子は心者形之君也而神明之主也出レ令而無レ所レ受レ令自禁也自使也自奪也自取也自行也自止也故口可三劫而使二墨一云一形可三劫而使二屈伸一心不レ可二劫而使レ易レ意（解蔽篇）と云ふて、心は形體の主人公で心

が行かうと思へば、足が運び、心が止まらうと思へば、身體が止まる、そこで口は無理やりに言はせたり、默らせたりし、又形體は、威力を以て屈せたり、伸ばせたりも出來るが心に至りては、劫して其意志を易へしむることはならぬ、ソコデ心を能く教育し、能く保護して、一般國民を協同一致せしむることが大切である。

協同の必要なることは、彼の毛利元就公が示された、一矢折るべく、十矢折るべからず、の教訓でも明かで、一本々々なら折れる矢が、十本も集ると折れないと云ふが、卽ち集合力の妙用である、又コップ一杯位の水を、一年置ても其中から魚は生せぬ、然るに何萬石、何十萬石と云ふ大な水を、一年も溜めて置けば、澤山な魚が生ずる、又一坪や、二坪の土では、格別の者も生せぬけれども、大な山になると、澤山な動物が棲息する、此を古賢は、積土成レ山風雨興焉積水成レ淵蛟龍生焉積善成レ德而神明自得聖心備焉と、云ふて居る、それで貯金の如きでも、零碎の金では、何の力用もない樣でも、深山集合すると、遂には一國生産の大資本となり、國力增進

の基礎となるから、何事に依らず、協同一致と云ふ事が必要である。

然るに、日本人の惡弊として、此協同一致の觀念が乏しい、最も戰時には、能く團結するが、平時は全く反對である、例へば町内で、何か事業を起さうと云ふて集て見ると、甲が何か云ひ出すと、他の者は其說を充分謹聽しないで、直に反對を唱へ理非曲直を正さず、利害得失を訪ねず、唯だ〳〵自分の我を張りて、他人の說を叩潰さうとし、そして互に他人の惡口を云ふて居る、支那の學校より聘せられて、敎授に往た人の長續きせぬのは、他に理由もあらうけれど、多くは相互に惡口云ふに由るのぢやさうな、彼は今此地に來りて、大な顏して居れども、斯く〳〵の人物である、彼は日本に居ることの出來ぬ事情があるので、此所に勤めるのである抔と、互に惡口を云ひ合ふ、是でどうして協同が出來やう筈はない、西洋人は、悉く同一といふ譯ではなけれども、冷靜に物を考へて善事と見れば、能く協同するさうである、夫れだから物事が能く運びもすれば、又發達するのである、依て是迄の惡弊を

脫却して、協同一致で萬事を處理すると云ふことが、大國民たるの第一の覺悟でなくてはならぬと思ふ。

(五)國家的觀念を旺盛にし宗敎的信仰を鞏固にせよ　其協同一致の精神を喚起せしむるには、一般國民として國家的觀念を旺盛にし、宗敎の信仰を鞏固にせしむることが、最良方法と思ふ、兎角今日迄、彼此我他と、排他心の强いのは、畢竟多年鎖國主義を取りた結果、對外的進取の觀念が乏しく、唯だ〳〵島國ばかりにごた〳〵して、因循姑息に流れて、公平無私の念慮、佛敎の所謂無我の感念がなくなつたからであらうと思ふ、それでも日淸戰爭とか、日露戰爭とか云ふ場合には、舉國一致になつたではないか、左すれば、國家の大事と云ふ場合には、協同一致は出來るのであるから、緩急の場合のみならず、何時も國家的觀念と、之に加ふるに、佛敎無我の信仰さへ旺盛であれば、一致の出來ぬ事はあるまい、我國は上に萬世一系の皇室を戴き、建國以來一度も他國の侵略を受けぬと云ふ、二種の世界萬國に冠絕した

特色を有して居るが、此他國より侮を受けぬのを、唯だ武力のみでなく、富力でも智力でも、何でも萬國に超絶せしむる樣に努むることが、今日の國民たるものゝ覺悟でなくてはならぬ、依て今後は、政治家でも、宗教家でも、教育家でも、互に協同して國民を指導するの考を起し、一般國民も、亦其等の指導を仰ぎ、又相互に協同動作を取る樣にし、恰も太陽を中心として、衆星が其周圍を廻轉するが如く、國家を中心として、一般國民が上下一心協同一致して、國力の增進を計ることが、大國民たるものゝ覺悟であると思ふ。

十二　風教の改善

(一)日露戰爭と歐米の日本研究　日露戰役に於て我が蕞爾たる日本が、尨大なる露西亞と戰ふて、連捷したのは、抑も何故であらうと云ふ所から、世界各國に於て、色々研究をし、又批評をなし、既に英國のロンドンタイムス新聞紙上には、戰爭の

當時、國民の魂と題して、數日間に亘る論文を掲載して、日本武士道を說明した、又中には日本戰捷の原因を、政體の革新にありとして、日本は早く立憲政體にしたからと云ふ樣に考へたのもある、乃ち日本人は愛國心が强いから勝つた、其愛國心の强いのは、立憲政體の爲めであると考へたか、戰爭後露國では、直に議會を開て立憲政治を行ふ樣になり、又其戰爭を一番近所の棧敷で見物して居た支那も、憲法調査を初め、大臣を我國へも、英國へも派遣して、其々調査せしむると云ふ有樣、又一方の觀察者は、戰爭に參加した兵卒の年齡より考ふれば、二十三年の教育勅語發布已後の教育を受けたものが多いと云ふ所から、日本大捷の原因は、　教育勅語の賜であると云ふ所に氣付き、それから日本人に對する、日本の　天皇陛下の御勅語の勢力と云ふものは、大したものである、　陛下が、一たび「朕ハ爾有衆ノ忠實勇武ナルニ依賴シ速ニ平和ヲ永遠ニ克復シ以テ帝國ノ光榮ヲ保全セムコトヲ期ス」と仰せられると、日本の陸海軍人は、感泣して死地に飛び入る、日本人は　陛下の

命には、死せよと命ぜらるゝも、喜んで死ぬ、斯の如く、國民に對して勢力のある皇帝は、世界に國は多く、帝王は多きも、其類を見ない、日本人は　天皇陛下の勅命には、困難に入るをも、生命を棄つるをも辭せぬ、實に日本の　天皇陛下の御勅語は、五千萬の日本國民の死活を自在にさるゝ力があると氣付くと同時に、各國に珍重する樣になつた、それで先年英國から大和魂の研究をしたいから、其說明の出來る學者をよこして呉れと云ふことを申して來た、そこでこちらから、澤柳政太郎氏此選に當り、英國に行かれたが、氏が文部次官になられ、呼びかへされた爲めに菊池大麓氏が行かれた、其菊池博士が、英國に行て只空な話をしたのでは、雲を摑む樣なことゝ云ふので、二十三年の詔勅をば、七八名の學者が、文部省に集つて飜譯をして、それを持て行て話された、所が非常な歡迎を受け、大小の新聞が、口を揃へて稱揚したのみならず、其英譯になる、詔勅を、印刷に附して、英國の文部大臣は、之を四百人の視學官に分つて、爾來我國民は、此主義を以て精神とせよと云ふ

たとのことである、其他亞米利加合衆國に於ても、醫學博士の高木兼寛氏を招て、軍事衞生の講話を聽き、圓覺寺の宗演禪師を聘して、佛教の話を聽たことは、御承知であらう、又獨逸では日露戰爭の事を、假設的に研究し、又同國法科大學にては露國の經濟と日本との比較と云ふ問題を論じ、又一昨年、日英博覽會の教育部を引受けて、文部省の田所局長が、英國に行かれた時、先方のイングリスマンと云へる雜誌に、教育勅語を批評して、此勅語は、古來如何なる高僧哲士も、斯の如き金言を示せしものなし、此を持ち居る國は、我が同盟の日本なり、日本は五六年前迄は、半開國と思ひしに、斯くも長大の進步發達を爲せしは、大に其原因あり、日本の歷史を通觀するに、二千五百有餘年の久しき間、未だ嘗て一回たりとも、外國の辱を受けず、英國は老大國と云ふと雖、常に屢々外國より困しめられたり等と書て居り、又エリスバアカーと云ふ人は、大英國と云へる四百有餘頁の書を著はし、初めに英國の國狀を述べて、最後の章に至りて、愛國心か個人主義かと云ふ問題を

掲げ、五十頁餘、日本の事のみを書き、日本は古來吾人の私淑せる、アゼンスの文明と、スペータの武勇とを有せり、英國は個人主義の國なり、日本は愛國主義の國なり、是が僅に三四十年間に、驚くべくして驚くまじき長大の進歩をなしたる所以なりとし、非常に稱讃し居り、其他國内到る所、日本的のもの多く流行し、婦人の裾を締むるとか、又バリーの最新流行にも、日本的のもの多く、又旅行には、信玄袋に柳行李を用ふる、と云ふ有樣であるとのことである、斯の如きの有樣である上は、我國民たるもの、己の職責の偉大なるを覺醒し、益々我の長所を發揮して、又彼の長を取りて、以て世界の一大强國たるに恥ぢざるの決心がなくてはならぬ。

(二)我國思想界の現狀　歐米人の日本を研究すること、精密を極むるに至りて、其長短共に能く調査して、近時は、日本人は愛國心は强きも、其他の道德に至りては頗る幻稚であると云ふ樣に云ひ出した、彼等ばかりでなく、實際我々國民が考へても、幾多の警戒すべき點がある樣に思はれる、抑も　御勅語に「學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ等」と仰せられてあるが、實際智識も、道德も、能く完美して居るかどうか、元來世界の文明は、多く科學の進歩に原因して居るのであるが、其科學は、未だ我國では甚だ幼稚である、科學を應用して成立する、總ての我國工業の狀態を見ると、實に心細い、大部分の器械は、外國から輸入しなければならぬ、日本では未だ充分に製作することが出來ぬとは、殘念である、若し外國で其器械を賣らぬとならば、日本の製造業は、忽ち衰へて仕舞ふのである、國の名譽を保つ爲めには、力が必要である、其力を成すものは、腕力や智力は、申迄もないが、器械の力も亦重大である、然るに我國では、自ら其器械を造る力が乏しい、又國の富は、科學を應用した所の製造工業の獨立によりて生ずる、然るに製造工業は、日本で行はれても、其器械をば、外國から買はなければならぬ、それでは未だ製造工業は獨立したのではない、此は勇敢なる軍隊を有つて居ても、其軍隊の有する兵器を、外國から買ふと同じことである、されば日本の產業の獨立の爲めには、

其兵器を自ら製作することが出來なければならぬ、我國は未だ其域に迄達して居ない、又商業取引を見ても、近來商業の發達は、何十億何百億と云ふ大な取引額で、或は電信電話により、或は一時間に五十哩と云ふ速力の汽車、或は二十五浬以上の速力を有する、數萬噸の蒸氣船を以てやつて居る、實に萬事大規模となつて來たのである、又總ての取引を便利ならしむる、信用制度の發達は、實に盛んなものである、此信用制度は、卽ち普通世間に唱へる商業道德を基とするものである、然るに日本の商業道德の狀態を顧ると、甚だ遺憾な點が多い、我國には如何に忠君愛國の風があらうとも、勇敢なる軍隊があらうとも、商工業の競爭の際に用ふべき、最も重要なる武器たる信用が乏しい樣では、とても世界的國際間の競爭に、十分優等なる地位を占むることは六ヶ敷い、是で御聖諭の御趣旨が普及して居ると云はれやうか。

凡そ物質科學の進步は、之に加ふるに健全なる道德宗敎を以てするにあらずんば、

人をして實利一邊の者と化し、溫き人情を冷却せしめ、拜金宗の奴隸たらしめ、其弊の極まる所、忌むべき恐るべき、個人主義、社會主義等を生じ易いものである、此が爲め、佛國にては、國民敎科書を改正するに當り、日本の愛國論を多量に加味し、英國にては、本土と各殖民地との團結を强くするが爲めに、帝國主義の敎育を奬勵せんと腐心せるに際し、却て我國にては、未だ科學が充分發達せざる間に、早くも其弊害を輸入して、個人主義、社會主義等の、忌むべき恐るべき人物を生出し甚だしきは、國家同朋を荼毒する賣國奴や、無政府主義者を生ずるに至つた、聞く所に依れば、彼の常陸丸の沈沒したのは、全く露探の爲めであるさうな、敵國が露探を募るには、何萬と云ふ金を拋つたか知れぬと云ふことだが、若し露探が今少し成功したならば、東鄕艦隊が、露艦を對馬海峽に全滅することは六かしかつたかも知れぬ、實に言語道斷ではないか、露探が居たばかりに、常陸丸の同朋二百餘名を失ふた、實に殘念である、其二百名の內には、第二の正成も居たらう、又義貞の如

き者も居たらうと思ふ、それをむざ〳〵海底に沈めて殺すと云ふは、實に千歳の恨事、明治昭代の歴史を汚したと思へば、憤慨に堪へぬ、神代已來、苟も吾祖國の秘密を賣て、敵より金を貰ふて、自分の懐を肥すと云ふ奴は、今迄一人もなかつた、神功皇后の三韓征伐を初め、蒙古の襲來、朝鮮の役、日清の戰爭などに、蒙探と云ふものもなければ、清探と云ふものもない、然るに日露戰爭に至て、初めて露探と云ふものが現はれたのは、慥かに我が國民道德の缺損せるを示したので、露探も世に現はれずしてあつたものも、外にまだ澤山あつたかも知れぬ、又先年國民の耳目を驚かした、彼の無政府主義者などは、實に道德の頽敗を示して居るので、新井白蛾翁の修身訓に、書を讀むの邪智は、國の大義を害すと云はれたは、是等の類であらう、而も斯の如き、恐るべき精神的傳染病の黴菌は、果して何處に伏在するやも計り難いとは、實に危險千萬ではないか、此等は最も恐るべき道德の墮落を示したのであるが、左程迄になくとも、色々の弊害を來し、延ては、意外なる害毒を流す

ものゝ中、第一は個人主義や自然主義で、是も唯だ利己を本とする所の個人主義や情慾の滿足を主とする自然主義は、第一に品性の墮落を來し、次には家庭の紊亂を釀し、其より鄕黨なり、國家社會に、大なる害毒を流すものである、抑も今日、修養々々と云ふが、其修養の第一義は、克己抑制で、自己の私心私慾に打克ち、妄りなる情慾を制禦するにあるので、孔子も克己復禮と云ひ、釋尊も惡魔（多くは內心の私心私慾）を退治せられた、然に徒に本能發揮の名の下に、好きなことは爲せ面白いことは勝手に振舞ふがよいなど、獸慾を逞ふする自然主義が、幾多の青年男女を過らしめ、延て國家の兵力と生產力とを減殺せしむるに至りては、實に由々しき大事である、又利己を本とする個人主義は、只管に己の利益得分のみを考へて、他のことを思はぬから、第一には家庭の不和を生ずる、親は親の勝手を思ひ、子は子で自分の勝手を考へ、夫婦兄弟、皆然りであつたら、とても家庭が圓滿に治まらう筈はない、古來忠孝は最も大切なる國民道德として重んぜられ、又我國の精華と

して誇る所であつた、然るに近時、此美德たる孝道も、段々に衰頽し、不孝不悌の徒が、日に增加するは、一には漢學及び佛敎を度外視したのと、一は誤りたる個人主義の跋扈が、其主因をなすと云ふてよからう、孝は百行の本より、孝道旣に衰へて、隨て夫婦兄弟の情誼も薄で來るは、又數の免れざる所、一家は常に平和を缺き家庭は何時も紊亂し、隨て國民としても、德義の感念は減却し、彼の納稅と兵役は國民の最大義務であるに、世には色々な方法を設けて、之を避けんとする者さへある、又彼の選擧などに、脅迫手段や、賄賂などを用ひる樣なことは、眞實に德義があつたら、こんなことはない筈である、又選擧する人も、御金を貰ふたり、酒肴の御馳走を目的として、又は偏頗なる政爭心に驅られて、議員を選擧する筈はないのである、然るに選擧の模樣を見聞すると、實に道義を重んせぬ者が多いとは、殘念ではないか、次には主婦と下女の關係、若は雇主と傭人との關係が、從來は頗る圓滿に行はれて居た、乃ち古は下女や下男を雇ふても、一生主人の恩義に感じ、又徒弟や職人も、一生涯親方々々と尊重して居たが、今日は中々さうではない、是は一は經濟問題も關係するが、又一には道義の頽廢からも來て居る、又最も注意すべきは愛鄕心の缺乏で、今日は社會組織の變遷と、生活難に迫られて、昔の如く、常に一家團欒の樂を許して居らぬ、此が爲め家鄕を出でゝ、東に西に移住する者が多くなり、又海外などに飛び出す者も、段々增加して居る、是は昔は第一に交通不便、第二が階級制限、第三が比較的生活が無事であつたから、遠方に移住する者が少なかつたが、今日は第一が交通便利で、何所迄も手易く行かれるのと、又昔は士農工商、皆其階級が定まりて居て、子孫は唯だ父祖の業を繼で居ればよかつた、然るに今日は、四民平等で、親は農業家でも、子供は軍人となり、乃至官吏となる、其れで親は田舍に居ても、子孫は都會に居ると云ふ有樣、又我國も、段々人口が增加し將來も益々蕃殖するであらうが、其が國內丈けに固まつて居ては、世界の富の分配に預かることが出來ず、益々生活困難になるから、或る程度迄は、海外にも飛出し

て、富を得る方法を工夫することも必要である、併し兎角郷里を遠く離れると、愛郷心が薄らぎ易い、又海外へ飛び出すと、兎角本國との因縁が漸次に乏しくなり易いもので、獨逸の殖民政策上、大に苦心する所は此處であると云ふのは、獨逸は我國と殆んど同樣に、六千五百萬の人間があるが、是迄海外へ出て居るものが、三千萬と見られて居るが、其三千萬の人間が、獨逸にどれ丈の力を與へて居るかは疑問である、獨逸人は最も他國の領土で、他國人に同化し易いので、其丈け何處へ行っても、仕事をするのであるが、又一面に於ては本國との關係が甚だ薄くなる、それで獨逸では、己の領土から他國の領土へ移るには、同化してはならず、しなくては又他國へ行て事業をするに六かしいと云ふので、此所の兼合を宜くしやうと云ふことに、骨を折て居る、其れで海外へでも勇飛しやうと云ふ人に對して、本國を忘れしむることなき樣にせねばなちぬ、それには愛郷心の養成を怠りてはならぬ、抑も愛郷心はやがて愛國心であるから、今日の急務は、人をして己が郷里を愛する心を

充分に發揮せしむることが必要である、胡馬の獸にして尚ほ北風に嘶き、越鳥の禽にしてなほ南枝に巣つくる、人にして愛郷心のないものはない、先年米國シカゴ博覽會開設の際、エスキモー人種を連れ來りしに、彼等は文明繁華の地にありて、衣食住に無限の快樂を享けながら、猶ほ故郷の空忘れがたく、幾度か氷山雪塊の殊境に逃れ去らんと企てたさうな、又嘗て青が島と云ふ南洋の一孤島に、火山爆發の時、火光焔々として天を焦し、はては石を飛ばし、灰を降らしたれば、島中の人畜多くは斃れ、僅に十數名、八丈島に逃れしも、其故郷忘れがたく、火の止むを聞て喜び勇んで、其の恐るべき噴火の島に歸りたりと、實に愛郷心は生物の先天的美性である、人にして愛郷の念なきものはない、けれども久しく郷里を離れし者は、去る者は日に疎して、種々の事情上、遂に其精神を實現するの機會が乏しくなり易いのである、今や社會組織の變遷と、生活困難とは、人をして餘儀なくも、郷里を離れしむるもの、漸次增加しつゝあり、中には一種の成功熱や、虚榮心に驅られて、

特更に田舍の生活を厭ひ、都會地に集りて、而も事初志に反し、困窮の極、墮落して遂に無賴漢となり、爲めに貧窮者の增加と、農村の荒廢とを招き、國家の財政上と、國民の道德上とに、恐るべき影響を來すものさへある、苟も帝國の將來を慮るもの、誰か戒心せざるべけんやである。

(三)救濟策　已上大略我國思想界の現狀を述べ、風敎の墮落を列擧したが、此等は畢竟淺薄なる物質主義に中毒したものと云ふて宜しからう、然らば此を救濟する良劑は、何かと云へば、所謂精神敎育である、卽ち宗敎と道德とである、殊に氷よりも冷き、紙よりも薄き人情を融和し、善良なる國民を造らんとするは、理窟一邊の倫理や、道理に矛盾する信仰では駄目である、完全なる大道德、大宗敎でなければならぬ、抑もワシントンの敎書中にも、宗敎と道德とは、國家の保存を維持する根本柱石にして、之を破壞せんとするものは、人道の敵國家の賊なりと云ふて居る然るに今日東西共に、無信仰者が年々增加して、一般の人々が、次第に宗敎より離れんとして居る、歐洲にてもハンスヤコツプ氏の調査に依れば、上流者は百分の九十、中流者は六十、下流者は五十は、無宗敎者にして、特に社會黨は、何れも無宗敎者、無神論者なりと云ふて居る、獨逸の如きは、千八百七十四年には、選擧權を有する社會黨は、三十五萬人なりしが、千八百九十八年には、二百萬已上に達し、千九百三年には、三百萬に達し、現今にては、恐らくは三百五十萬人已上あらうと云ふ見込、此外此等の妻子などを加へると、夥しき者である、然るに我國には、幸に斯の如きに至らぬのは、果して何に原因するであらうか、此に就て感化救濟事業に熱心なる小川博士は、第一には國民性の然らしむる所、第二には下層社會が比較的に宗敎心に富むが故であらうと云はれた、さて何故に今日無信仰者が增加するかと云ふに、同博士は四個の理由を示して、第一には宗敎の素養缺乏するが故に、昔は歐洲にては、學校でも敎科書中に、多量に宗敎を加味せしに、近時は段々減少し特に佛國の如きは、全く學校より宗敎を分離した、(宗派の競爭を避くるの策に出で

しもの）其結果犯罪人の比例は、三倍にも増加した、元來人は何物かを信ずる性質を有するものである、故に眞正なる者を信せねば、必ず邪曲を信ずる、此故に無信仰の所には、却て迷信を生ずるもので、有名なる無神論者なる佛國のボルテール氏の如きは、暗室には幽靈ありと信じて、之を厭ふたとのことで、（人は智情意の三を有す、此故に彼の智的方面は、無神論を主張するも、彼の情感は之を滿足せざりしものか）又迷信の結果、種々の犯罪を生ずるの例證は澤山にして、彼の怪しげなる加持祈禱の如き、又膽取事件の如き、其他枚擧に遑あらずである、又上流社會に無信仰者が多いから、彼等の家庭は、迷信の巣窟と評してもよい程である、見よ延命術とか、長生術とか、其他手相、人相、方位、墨色などより、遂に狐狸等の祟拜者は果して何人なるかを思へば、實に憐れ千萬である、第二には剛慢心より來る人は兎角妄想心を有する所から、段々剛慢心を生じ、己が價値を知らぬ者が多い、此が爲め、宗教を信ずると云ふことを、何だか意氣地がない樣に思ふ所から、特更

無信仰者を標榜するものが多い、何ぞ知らん、彼等の無信仰とは、眞正の信仰なしと云ふの意にて、裏面には迷信の奴隷者とならんとは彼等は以て世の愚夫を欺くべきも、一たび非常なる事件に遭遇せんか、果して能く狼狽せざるや否や頗る疑問である、第三には世人が段々寺院教會より去るが故に、寺院と信仰とは、皮と實との關係に似て居る、皮を離れて獨り實のみを得難さと同樣で、信仰の薄らぐのも最もである、第四には近來盛に行はるゝ雜誌、新聞、新刊物、通俗講話等が、世人に投合せんが爲めに、無信仰を鼓吹するの傾きあること、此も亦預て力あるのである凡そ人は深く知れば知る程、智識の不足を感ずるものである、然るに淺薄なる智識は、人を萬能の如く迷信する所より、遂に神佛等を否定するに至るのであると云はれた、又近來自殺の流行するのも、畢竟無信仰の結果で、ウインナ大學教授マザリック氏は、自殺は無宗教的半熟の教育の普及によりて、增加すると云ふて居る、特に近來兒童の自殺などは、最も寒心に堪へぬ次第である、幸に我國には、先に示す

が如く、世界を動かす程の　御勅語が御發布になりて居り、且つ又古來長き久しき間、我國の人心を感化薫陶し、而も今日歐米の學者が舌を卷て感服する程の、智情意三方面、何れより見ても完全無缺なる佛敎があるから、今日の思想界を救濟する良劑も、他に尋ねるの必要はない、所謂道は邇きにありで、目前に良劑はあるのであるから、今日の急務は、拳々服膺と、其良劑を各自に服用すべきである、我國思想界が如斯墮落したのは、採長棄短の名の下に、捨つべきものを捨て、取るべきものを取りたるも多けれども、其と同時に、其捨つべからざるものをも、併せ捨て、又取るべからざるものをも併せ取りたるも少なくないので、佛敎の如き、儒敎の如き、是等を如何に眺めしか、如何に取扱ひしか、又現今の弊害は、多く所謂西施の顰に傚ひしの類にはあらざるか、今日は一般に稍々覺醒の機運に向ひ、儒敎復興、信仰必要の喚が高まりつゝあるから、此時に當り、眞正なる道德宗敎を皷吹して、精神的患者を救濟し、國家社會に貢献することは、先覺者の任務ではあるまいか。

(四)青年の責任　特に今日の青年は、將來の大國家を背負つて立つべき、大責任を持て居るから、忠實に各自の職務を勵むべきと同時に、常に世界の大勢と、又世道人心の趨歸とを察し、殊に我國の思想界の現狀は、實に戒心すべき秋であるから、忠君愛國、忠孝一致の國民道德を發揮して、世の中に如何なる幽玄神秘の宗敎があらうとも、どれほど高尙深遠なる哲學があらうとも、　御勅語の御趣意に背反する樣なものは、決して採用せざる樣に注意し、　御勅語を以て凡て道德宗敎の正邪を判別するの規矩と心掛け、善良なる國民たるの覺悟がなくてはならぬ、近時文部省や、內務省に於て、祖先崇拜思想を皷吹しつゝあるも、畢竟現時の狀態に戒心してのことゝ思ふ、其祖先崇拜も、單の形式ばかりでは駄目だ、祖先の肉體は、死と共に腐爛しても、其精神は生きて居ると云ふ感念が、附いて居てこそ、其祖先の遺志を承け繼いで、祖先の企望を達を潰してはならぬ、子孫たるものは、其祖先の遺志せしめねばならぬと云ふ考が起る、其れから子孫たるものゝ道は、祖先の遺志を實

行し、祖先の遺風を顯彰するのが、子孫の務であると云ふことも、此處から起る、其れからして、神を祭ること神在すが如く、父を祭ること、父在す如しと云ふ樣になりて來て、死後の孝養と云ふことにもなり、又臣として亡君の遺志を繼ぐと云ふ所から、忠義の働きも出來るので、彼の四十七義士の如き、何れも主人の精神が死んで居るとは思はぬ、亡君の遺志を繼ぐと云ふ感念から、彼の樣な大忠義も出來たのであらう、其で祖先崇拜と、忠孝の大道とは、大に關聯して居り、又精神不滅の感念が伴ふと同時に、宗教の信仰を喚び起すもので、古來我國は、神儒佛三道を以て、能く此精神を薫陶して來た、就中吾佛教は、智情意圓滿の宗教であるから、吾人は佛陀を信ずる事に依て、佛陀と一致し、入我我入で、卽ち相對と絕對と一致するから、我等は御佛の智慧に由て、愚痴の迷闇を打破して、前途に光明を認め、佛陀の大慈悲に感化せられて、仁慈博愛の精神を惹起し、如來の勇猛精進を感じては殊に今日の青年に最も必要なる、意志の鞏固も自ら獲得せらるゝのである、見よ日

蓮上人は、絕海の孤島に流刑せられながら、我れ一人生存せん限りは、日本國の危難憂ふるに足らずと豪語し、親鸞聖人は、僻陬の地に謫居の身となりて、我れ若し配所に赴かずんば、何に由りてか邊鄙の群類を化せん、これ猶ほ師教の恩致なりと感謝して居られる、斯の如き鞏固なる意志を修得し、順逆共一切感謝の精神を惹起せんか、如何なる艱難も恐るゝに足らず、如何なる場合にも人を恨みず、勇猛無倦に、國家社會の爲めに盡すべき筈である。

前に申した如く、凡て鄕里を愛する心は、卽ち國家を愛するの心であるから、先づ近く鄕里の爲めに盡すと云ふ所から始められ度事で、彼の亞米利加の富豪カーネギーが、其鄕里なる蘇國ダンファームリンと云ふ小さな町に、圖書館やら公園やらを寄附し、又其町を以て模範的の都市とするが爲めに、五百萬圓の巨額の金を寄附して、之を以て都市の發達の爲めに、種々な事業を經營して居ると云ふことは、縱令其信仰を異にするとは云へ、其事業は、大に學ぶべきことゝ思ふ、彼の海外へ出稼

して居る人々には、最も能き教訓と信ずる。

又佐賀縣神崎郡脊振村の志波六郎助氏の如きは、非常に村の爲に能く世話をして居る人で、例へば自費を投じて各地方を視察して、産業上に、又製茶養蠶とか云ふことに、常に村人を奬勵指導し、又常に山野を廻て、林相を見て歩き、又村の植林する時になれば、自分が眞先きに出て行て世話をする、又春の彼岸から秋の彼岸迄は毎朝早く起きて、其村の小高い山に登つて、法螺貝を吹いて村の者を呼出す、村の者は其法螺貝の音を聞くと、起きると云ふことで、十餘年間少しも缺かしたことはない、其んな所から村治も能く行はれて居るそうな。

又山口縣美禰郡伊佐村の杉唯一氏は、村の繁榮を圖る爲めに、桐や柿の苗を戸別に配つて、是非植ゑさせて呉れよと、自分が植付に歩かれて、そして自分、一々皆手入れして、今日では桐が五萬本、柿が十萬本と云ふ有樣で、伊佐村は一名桐村と呼ばるゝ程にて、毎年桐のみの價格參千圓、其他果實の賣高にて、其村は多額の收入があるやうになつたそうな、又氏は四十八代目の人と見にて、自分の先祖の墓を立派に致したいと云ふ考から、石工に命じて四十七本の墓を注文し、而も自分の先祖の墓は自分が運ばねば濟まないと云ふので、石工が殊に無一文で運ばんと云ふを斷りて、一本づゝ悉く自分が運ばれたと申すことである、凡て模範村などを見るに、其中心となる人が能く地方の爲めに世話をして居るからである、どうか青年諸君も地方の爲めに盡し、富國强兵の基礎を固められたきことである。

(五)結論　要するに我國思想界の頽廢を改善し、精神的疾患を救濟せんとするには教育の　御勅語を規矩とし、忠孝一致の大道を闡明にし、報本反始、感謝恩德を本とする道德教と、智情意三面何れも完全無缺なる佛教の信仰を普及せしむることが今日の急務と思ふ。

古來神儒佛三道は、神道は人間の始道を說き、儒道は人間の中道を示し、佛教は人間の終道を教ゆるものとして、能く調和して、忠君愛國、祖先崇拜の思想を涵養し

來たので、彼の親の命日さへ知らぬと云ふ樣な思想とは、全く反對である、それで政治家も、宗教家も教育家も、能く協同一致して、國家社會の爲めに、風教の改善を計らねばならぬ、輙もすると兎角分立背馳の有樣となりて、妙な結果を來すことがある。

先年も某博士が或る中學校長に神社に參拜するの精神を尋ねられて、返事の出來なんだ人もありたと云ふ話、又或小學校で一人の生徒が、先生に地獄極樂はありますかありませぬかと問ふたれば、先生は地獄極樂は無いものです、それは嘘ですと答へた、處で其生徒が、之を父兄に告げたので、段々と其話が擴がり、斯る無責任なことを云ふ先生に、子弟の教育を任かするは、甚だ危險であるといふので、之が爲め終に其先生は轉任を餘儀なくされたとのことである、此は自分は知らねば知らぬとか、若くは寺に行て聞けとか云へばよいものを、己が知らぬからとて、直に嘘だなどゝ云ふは、實に言語道斷である、斯ることを一般國民に公言しても憚らぬと思ふか、將又如何なる人より難問を受けても、立派に答辨することが出來ると信じて居るか、兒童は將來の國民で、特に其教育は大切であるに、如何に兒童の智識が淺薄なればとて、斯る無責任なことを云ふて聞かすとは、己の天職を心得ぬ者と云ふても不可なからう、是等は畢竟協同一致を缺ぐの結果であるから、今後は成る丈け同心協力して國民の指導教化を計りたきもので、其には第一に日曜日の神聖を保つことが必要であらうと思ふ、此は特に都會地に於て其必要を感ずるので、元來日曜は神に對して感謝の日である、然るに現今の有樣は、神の日に非ずして、惡魔の日となりて居る、それで近來は歐洲にても、日曜日勵行の說盛に行はれて、獨逸などは、二十年前は日曜に就業して居たが、今日では法律上より奬勵して居るさうな此は一は勞働保護より來たのであらうが、一は日曜日を神聖にせんが爲めである、其れで日曜休業は唯だ肉體の休養のみならず、精神も休養せねばならぬ、然るに多くは其本旨を忘れて、徒に酒色に耽り、果ては罪惡を犯して、遂には惡魔の日となな

るとは遺憾千萬である、バーデンで調査した所によると、同國在監者二千二百六十七人中、日曜及び祭日に犯罪せしものは、六百五人、卽ち百分の二十六、七の割合とのことだが、實際に日曜に罪惡の種子を播きて、月曜若は火曜に其果實を結ぶものが多いから、餘程多數に上る筈である、又正月などは、風俗に對する犯罪が多い、依て日曜を神聖にし、若くは春秋の彼岸、祖師や先祖の忌日に、寺院敎會に集る習慣を付くる樣に勵行することも、風俗改良の一策で有らう、又靑年會、在鄕軍人會又は婦人會、其他會合の機會を以て、眞正なる道德宗敎の普及を講ずるも、又一法と思ふ。

近來米國では、學校已外の敎育と云ふことを大變大切に考へて、非常に力を入れて居る、其が爲め懸賞論文を募集して居る所もある、唯だ金を貯める一方であつた亞米利加が、孜々此點に注意する樣になつたことは、頗る研究の價値ありと信ずるに依て色々の機會を利用して、協同一致、風敎の改善を講じ、世道人心に貢献するが國民の義務と思ふ。

武士道と佛敎 終

大正二年十一月十日印刷
大正二年十二月十五日發行

【御即位記念出版】
武士道と佛教

定價金五拾錢

著述者　中谷渡月
發行者　松田善六　京都市油小路花屋町上ル
印刷者　須磨勘兵衛　京都市北小路通新町西入
印刷所　合資弘文社　京都市北小路通新町西入
發行所　顯道書院　京都市西六條　電話下二八八六番　大阪二三四八番　口座東京四二一五番

不許複製

加藤咄堂氏序文　稲村修道師著

淨瑠璃教談

石版表紙美本　定價五拾錢
菊判二百餘頁　送料六錢

一名淨瑠璃說教

現今の世人に高尚なる教理を平易に說き諭すの方便としては色で道びき情で教へ戀を菩提の橋として渡して救ふ淨瑠璃を材料として以て大乘佛教の蘊奥因果業報の道理を有緣無緣の婦女子まで耳かたむけて聞法の手引の爲に毎席讃題を設け種々の因緣譬喩を言葉のまゝの文章に綴りたり再版忽ち賣切れ三版發行す

▲本書目次

▲孝道（梅川忠兵衛戀飛脚）
▲夫婦の愛情（壺坂靈驗記）
▲貧者の一燈物語（釋迦如來誕生會）
▲嫁姑（心中宵庚申）
▲妻かゝみ（天の網島紙治）
▲菩提の橋（壽の門松）
▲罪と報（博多小女郎）
▲あこぎの平次（同題）
▲梅若丸（隅田川木母寺）
▲淨瑠璃雜話（各淨瑠璃）
●日蓮記勘作住家●お駒才三鈴ヶ森●一の谷●其他
▲附錄をしへ草
大藏經中の趣味ある說話を集め揭げたり眞に本書は布教家の寶典なり

發行所　京都市西六條花屋町油小路上ル　顯道書院　振替電話大阪二三四八二九六八九

●青年及び實業家布教の好資料

【最新版】

椰陰小泉了諦師著

眞俗二諦 古今實驗の修養

定價金四拾錢
特價金參拾參錢
郵税金六　錢

頁數四百餘頁　寸珍ポケット入

目次概略百七拾五章

●君子は其始を愼む……
●日々に自己を省る……
●シガラヨッの修養……
●行ふ事を先にせよ……
●貧道の根元は信念……
●金儲けは珠數の力……
●不自由を常と思へ……
●顧慮すべきは我心……
●信道元也功德母也……
●上智安心而不安身……
●子を敎育する親心……
●修道院綱領の七條……
●男女の文字の敎訓……
●精神の調和と無我……
●驕信仰に恭敬なし……
●多忙なる惰情あり……
●法悦は大悲の月影……
●人間本來の道なり……
●ぜぬ事とする事と……
●心の置場を定めよ……
●宿善有難き老夫婦……
●落る樸と落さぬ法……
●自利々他自損々他……
●君子以明暗不廢行……
●男女の文字の敎訓……
●精神の調和と無我……
●嘘言は便利の隙長……
●善事を樂みて爲せ……
●信仰者に落膽なし……
●さうぢやけれども……
●身も心も大にせよ……
●貧乏の原因は何歟……
●心に佛陀を產めよ……
●人は活動に限れり……
●たのみ樣と述べ方……
●妙な御本願である……
●佛法入門の心得方……
●嘘言は便利の隙長……
●善事を樂みて爲せ……
●信仰者に落膽なし……
●肉體と精神の健全……
●身も心も大にせよ……
●貧乏の原因は何歟……
●心に佛陀を產めよ……
●人は活動に限れり……
●他の感想に自覺す……

發行所　京都花屋町油小路ル上町　顯道書院　振替大阪二三四三　電話下九八八二六

325
208

325
203

終